

# 「咄の会」活動記録

第一期

文責：世話人代表 山田敏之

## 第6回「咄の会」(落語実演)

日時：2013年2月14日(木) 14:30～16:30

場所：山ノ内公会堂

出演者：藤井 隆氏(高座名=風呂家さん助、東大落語会)

演目：『芝浜』『反対車』、及び『芝浜』の演出比較論

参加者：32名

懇談会：「千成寿司」(参加者：藤井さんを含めて11名)



東大落研OB武闘派「中興の祖」と自称する藤井さんは、会社社長という要職の傍ら、常々大ネタに取り組んでおられ、今回も種々工夫を凝らした演出で、大作『芝浜』を演じ切っていただきました。

『芝浜』といえば、誰もが指を屈する三木助、冒頭部分を大胆に切り詰めた志ん生・志ん朝、落語の神が無い降りてきたと自賛した談志、その他多くの噺家が手掛けています。藤井さんは噺を終えたあと、それぞれの噺家の演出をつぶさに分析比較し、自分はどのような意識で演じたかという、たいへん興味深い話を聞かせてくれました。また噺の中の芝浜が現在でいえばどの辺にあたるかなどといった解説もあり、最後におまけのサービスとして『反対車』を演じ、文字通り大車輪の演技で喝采を浴びました。

## 第5回「咄の会」(落語実演)

日時：2012年12月14日(金) 14:30～16:30

場所：山ノ内公会堂

出演者：田頭 叡氏(高座名=南達亭たま月、東大落語会)

演目：『干物箱』 及び三遊亭小圓朝師の思い出

参加者：29名

懇談会：「新とみ」(参加者：田頭さんを含めて10名)



趣味のビリヤードにちなんで、“何と言ったって玉突き”という高座名をつけたという田頭さんは、社長業を経て現在は技術コンサルタントが本業ですが、東大落研時代は三代目三遊亭小圓朝師匠直々に指導を受けたという武闘派です。今回は、親の目を盗んで花魁のもとに駆け付けようという道楽息子の策略が思わぬところで破綻するという、お馴染みの一席『干物箱』を熱演していただきました。

そのあと、小圓朝師匠の稽古風景や昭和30年代の街並みを映したテレビ放送のビデオを見せながら、当時の思い出を語っていただきました。参加者も「昭和は遠くなりなけり」といった感慨を抱きながら思い出の世界に浸ることができました。

## 番外編（４） 東大HCD 東大落語会寄席

日 時：2012年10月20日（土）12:00～17:30の間随時

場 所：東大本郷キャンパス・法文一号館21番教室

出演者：トリの三山亭多楽（十時博信）さんほか12名

参加者：6名（全く自由参加のため正確には未詳）

懇談会：なし

東京大学ホームカミングデー 東大落語会寄席	
10月20日(土) 12:00～17:30	
東京大学(本郷)法文1号館21号室	
初音の鼓	赤中半ど子珍
船橋	墨守幸輔 大
袴橋問答	常手大 奥
津橋院	信守幸輔 浦
くじやみ羅織	松家馬 愛
たが座	香取目留安 香
粗忽長屋	バルク本郷 内
質屋蔵	和蘭亭 南 坊
千物語	香澤手 たま月
寄合酒	鳥居新 さん助
千早振る	美々尾利 伊
代り目	森ヶ家二八
蜀山人	三山亭 多楽

合計13名の出演者が代わる代わる玄人はだしという熱演を

繰り広げてくれました。トリの十時さん（三山亭多楽、『蜀山人』）は、「咄の会」第1回で『井戸の茶碗』を、膝代りの長束さん（森ヶ家二八、『代り目』）は第3回で『鮑熨斗』を演じていただきました。お二人の達者な芸はすでに「咄の会」でも実証済みですが、この日も見事な出来栄でした。他の出演者の面々もいづれ劣らぬ腕自慢。これからも次々と「咄の会」への出演をお願いしていこうと思っています。ぜひご期待ください。

淡青会からの参加者もちらほら姿を見かけましたが、中には最初から最後まですべてを見届けた豪の者もいて、淡青会にも落語ファンが着実に増えつつあることが実感されました。

## 第4回「咄の会」（講演）

日 時：2012年10月11日（木） 14:30～16:30

場 所：山ノ内公会堂

講演者：山本 進

題 名：「落語の歴史 - その2」

参加者：21名

懇談会：「侘助」（参加者：山本さんを含めて10名）



第2回に続いて「落語の歴史」シリーズの続編です。今回は17世紀末に江戸で鹿野武左衛門、大坂で米沢彦八、京都で露の五郎兵衛と、三都でほぼ同時に座敷噺や辻噺が始まったこと、ところが思わぬ筆禍事件が契機となって100年近くも途絶えてしまったこと、そして18世紀末に落語中興の祖といわれる烏亭焉馬によって再興し、やがて我々に馴染みの深い三笑亭（最初は山生亭）可楽や三遊亭圓生などそれぞれの初代が登場するということまで伺いました。

さらに当時の小咄が現代落語の元になったことを、『武助馬』や『粗忽長屋』の例で学び、その後『粗忽長屋』を先代小さんのビデオで観賞しました。

ちなみに淡青会の「咄の会」の名前は、この烏亭焉馬が天明6年（1786年）4月12日に向島の料亭で開いた「咄の会」に因んだもので、それにあやかって第1回を2012年4月12日に開催しました。

### 番外編（3） 寄席巡り—その1

日 時：2012年9月20日（木）12:30～16:30

場 所：鈴木演芸場

出演者：古今亭志ん輔（トリ）ほか

参加者：10名

懇談会：なし



例会とは別に都内の定席を順次訪ねることを企画し、その第1回として、現存する寄席の中では最も古い鈴木演芸場（上野）を選びました。

番付でのトリは柳家はん治だったのですが、この日は代演の古今亭志ん輔が『子別れ（下）』を熱演して締め括りました。その他橘家文左衛門『道灌』、柳家三三『浮世床』、鈴々舎馬桜『紙屑屋』、柳亭燕路『金明竹』等々、腕達者な噺家が代わる代わる登場し、ほぼ満席の観客のご機嫌を伺いました。

寄席に入ったのは初めてという方も含めて総勢10名が、日本の伝統的な寄席演芸を楽しんだ一日でした。今後も年1～2回のペースで継続する予定です。

### 第3回「咄の会」（落語実演）

日 時：2012年8月9日（金）14:30～16:30

場 所：山ノ内公会堂

出演者：長束 宏文氏（高座名＝森ヶ家二八、東大落語会）

演 目：『鮑のし』 及び落語鑑賞の基礎知識

参加者：40名

懇談会：「ブラセリー梅宮」（参加者：長束さんを含め15名）



長束さんは第1回の十時さんとともに東大落研OB武闘派の長老の一人。今も各地で年20～30回は高座に上がるとのこと。三遊亭小圓朝師匠直伝の温雅な語り口は素晴らしいものがあります。また講談にも長じていて、宝井講談修羅場塾で研鑽を積み、「琴文」の名を許されているそうです。

今回の演目は『鮑のし』。人の好い亭主としっかり者の女房、歯切れの良い啖呵、教わった文句をその通り言えずに失敗するおかしみなど、古典落語の典型的な趣向が満喫できる楽しい噺です。性格が全く異なる4人の主要人物の見事な描き分けを十分堪能できました。

中入り後は、世話人からの依頼を受けて、落語とは何か、面白いとはどういうことか、落語の演出方法や落ち（サゲ）についてなど、いわば落語を聞くための入門講座のようなお話をさせていただきました。

参加者一同、急に落語通になった感じを得た一日だったといえます。

## 番外編（２） 立川志の春独演会 in 北鎌倉

日 時：2012年6月30日（土）14:30～16:30

場 所：雪堂美術館

出演者：立川志の春（落語立川流二つ目）

参加者：6名

懇談会：なし



淡青書道教室の幹事であり、「咄の会」の定連でもある神戸会員の関係されている落語会です。

立川志の春さんは、米国イェール大学卒業後三井物産勤務を経て立川志の輔に入門したという変わり種ですが、書道教室の繋がりから今回の独演会が実現したものです。

雪堂美術館の1階、小野田雪堂先生の書の金屏風を背にした高座は、並の落語会とは一味違った趣があります。演目は『初天神』『金明竹』『藪入り』の3席。いずれも若手落語家にありがちな誇張した表現とか奇を衒うところのない素直な芸風的好演でした。この日からすっかり志の春ファンになったという方も多いことと思います。

## 第2回「咄の会」（講演）

日 時：2012年6月28日（木） 15:00～17:00

場 所：茶寮「いの上」

講演者：山本 進（演芸史研究家、東大落語会）

題 名：「落語の歴史 - その1」

参加者：21名

懇談会：「御代川鯉之助」（参加者：山本さんを含め13名）



数々の落語関係の著作、『落語事典』や『圓生全集』の編集など、この道では知らぬ人のないオーソリティ山本進氏は、東大落研の草分けでもあり、また最近鎌倉淡青会にも入会していただきました。「咄の会」ではその山本さんに指南役をお願いするとともに、折にふれて落語に関する講演をしていただこうと考えています。

今回はその手始めとして「落語の歴史—その1」を伺いました。落語の源流は「古事記」や「竹取物語」にまで遡ること、「源氏物語」の末摘花の滑稽味、戦国時代のお伽衆が面白い咄を語り、それらがだんだん蓄積され、書物の体裁をとるようになったことなどと話が進み、17世紀はじめに「落語の祖」といわれる安楽庵策伝が登場し、『醒醉笑』を著したところまで来て、ちょうど時間となりました。第1回は当日配付された「落語史略年表」の最初の1行だけで終わってしまったこととなります。このペースでいくと完了までには少なくともあと十年ほどはかかりそうです。皆さんどうぞ最後までお付き合いください。

## 番外編（１） 北鎌倉 お坊さん☆アカデミー

日 時：2012年5月4日（金）15:00～17:30

場 所：円覚寺佛日庵

出演者：桂春蝶、林家木久蔵、林家木りん

参加者：4名

懇談会：「Lido」（4名）



「オレたちひょうきん族」などのテレビ番組プロデューサーとして知られる植竹公和氏が企画する落語会が、新しく佛日庵で始まりました。今回はその第1回で、「東西二世落語家競演」と銘打った会。まずは前座の林家木りん（木久翁の弟子）が『初天神』を演じた後、東の木久蔵（木久翁の息子）が『ちりとてちん』、西の春蝶（二代目春蝶の息子）が『山ノ内一豊と千代』で競い合いました。

若さの溢れる噺には大真打の芸とはまた違った趣がありましたが、司会役の植竹氏と出演者、それに佛日庵の住職高島氏も加わった掛け合いが談論風発まことに面白く、聞きなれた落語よりずっと新鮮な感興を得ることができました。

参加者は4人でしたが、終演後北鎌倉駅前の喫茶店 LIDO で、この会の感想やら「咄の会」の今後やらについて歓談しました。

## 第1回「咄の会」（落語実演）

日 時：2012年4月12日（木） 15:00～17:00

場 所：茶寮「いの上」

講演者：十時 博信（高座名：三山亭多楽、東大落語会）

演 目：『井戸の茶碗』

参加者：25名

懇談会：天ぷらひろみ（参加者：十時さんを含めて6名）



烏亭焉馬の「咄の会」に因んで命名したことから、その第1回と同じ4月12日に初回を開きました。

十時さんは東大落語会（東大落研OBの会）や学士会落語会の中心となる一人で、特に落語実演に長けている方（武闘派といいます）ですので、第1回の出演をお願いしました。大ネタ『井戸の茶碗』をたっぷり時間をかけて熱演。中入りを挟んで後半は、世話人からお願いしていた、東大落語研究会や東大落語会、学士会落語会などについての説明にとどまらず、なんと用意して来られたカラオケテープを使って『俵星玄蕃』をフルバージョンで朗々と歌い上げ、さらには学士会落語会出演者の似顔絵とそれに添えた狂歌を披露するなど、実に多彩な芸を惜しみなくサービスしていただきました。新生「咄の会」の初回を飾るに相応しい盛り沢山の会だったといえます。

## 鎌倉淡青会「咄の会」概要

### 1. 趣旨

- ・ 落語を愉しみ、落語にまつわる様々な知見を共有しつつ、愛好家間の交流を図る。

### 2. 活動内容

- ・ 開始時期： 2012年4月に第1回開催、同年6月の総会において新しい同好会として承認。
- ・ 例会日時： 現在は原則として偶数月第2木曜日\*（会場都合で随時変更あり）14:30～16:30  
開催場所：山ノ内公会堂（第1、2回例会の開催場所は 茶寮「いの上」）
- ・ 内容： 例会では東大落語会会員（＝東大落語研究会 OB）や噺家による落語実演、有識者による講演などを行なう。そのほか番外編として寄席や落語会への参加などを随時企画する。
- ・ 参加者： 固定会員制をとらず毎回鎌倉淡青会の全会員に案内し、その都度希望者が参加する。鎌倉淡青会会員の家族や知己も、会員の同伴または紹介により参加できる。ただし会場の収容人員を超える場合は会員を優先する。
- ・ 会費とその用途： 内容によってその都度異なる会費を参加者から徴収し、別途定める規約に則り、出演者への謝金、会場費、会場備品費の分割回収などに充てる。会員が同伴する配偶者については会費を減額することがある。
- ・ 世話人： 発起人（山田）を代表とし、数人の有志世話人が協力して運営にあたる。

### 3. 名称の由来

落語中興の祖といわれた烏亭焉馬（1743～1822）が、天明6年（1786）4月12日に「咄の会」と称する会を開き、太田蜀山人、朱楽菅江など狂歌関係者などを多数招いて、参加者が寄せた小咄を披講した。この会はその後ほぼ毎年1回催され、後には正月21日を定例とする年中行事化した。歌舞伎役者、戯作者、狂歌師、噺家など、いわば当時の文化人が多く集まり、その席で披講された小咄は後日咄本として出版された。本会はこの故事に因んで、会の名称を「咄の会」と定め、第1回を2012年4月12日に開催した。